

反橋

急峻なカーブの橋の正式名称は「反橋」とだが、水面に映る姿から「太鼓橋」と呼ばれることもある。この橋を渡することで、お祓ができるという言い伝えがある。

反橋の形は、地と天を結ぶ虹をイメージしているのかもしれない。神話では、伊邪那岐命と伊邪那美命という神が、虹の橋の上に立って矛で海をかき回し、日本列島を作ったとされている。伊邪那岐命は住吉大社の守護神の「父」であり、冥界への航海の後、海で身を清めたときに誕生したとされる。

この地には 13 世紀から橋が架けられていたという記録があるが、現在の橋は淀殿（1567-1615）が 1600 年頃に寄進したと言われている。淀殿は内戦を経て日本を統一し、1582 年から 1598 年まで統治した豊臣秀吉（1536-1598）の側室であった。淀殿は、徳川幕府（1603-1868）の創始者である徳川家康（1543-1616）と戦っていた嫡男・豊臣秀頼（1593-1615）のために神のご加護を求めていた。

最初のアーチ型の橋は船大工が造ったとされており、その後も造船会社を中心となって構造が維持されてきた。幾度となく改築や修理が行われてきた。階段が設置されたのは 1955 年のことで、それまでは水面にある木製の板の隙間が唯一の足場だった。

現在の橋は、鉄骨とヒノキの板でできている。長さ約 21 メートル、高さ約 5 メートル、幅約 6 メートルで、傾斜は最も急なところで 40 度以上ある。橋の欄干の金属細工は、江戸時代(1603-1867)から保存されている。

ノーベル賞作家・川端康成（1899-1972）は、反橋と名前を付けた短編小説でこの橋を有名にした。橋の上で母親からつらい秘密を打ち明けられた幼少期の出来事を思い出す男の物語で始まる「反橋」。男が幻想を打ち碎かれて、橋の向こう側を下るのが、最初に登った時よりも怖かったと語られている。